

資料提供

月 日	担当館名	電 話	担当者
11月 29日	県立近代美術館	tel: 088-668-1088 fax: 088-668-7198	学芸課 森、竹内 吉川、吉原

いち はら あり のり

特集展示「追悼 一原有徳」 の開催について

趣旨

徳島出身のユニークなアーティスト一原有徳の没後一年を機に、追悼企画を立ち上げました。制作の秘密がかくされた珍しい金属原版の公開と合わせ、現代のプリントアートに強烈な存在感を放ってきた、一原ワールドの魅力を凝縮して紹介します。えも言われぬ版のマジックとぜひ出会っていただきたく、ご案内申し上げます。

展覧会概要

- 名称** 特集「追悼 一原有徳」 一版のマジックに没入した半生ー
所蔵作品展「徳島のコレクション 2011-III」 特集展示
- 会期** 平成23年11月22日[火]ー1月29日[日] 開館:午前9時30分ー午後5時
- 会場** 徳島県立近代美術館
(〒770-8070 徳島市八万町向寺山 <http://www.art.tokushima-ec.ed.jp/>)
- 休館日** 月曜日、12月29日～1月4日、1月10日 *1月9日は祝日開館
- 観覧料** 一般 200[160]円／高・大生 100[80]円／小・中生 50[40]円
*[]内は20名以上の団体料金です。 *高齢者(65歳以上)・障害者は、観覧料が半額になります。受付でお申し出ください。 *小・中・高生は土・日・祝・振替休日、及び冬休み期間は観覧料が無料です。 *祝日の観覧料は、大学生と一般も無料となります。

出品内容 54点

モノタイプ版画「TAN93」、高さ3.6mの巨大な円筒状作品「COM ZOM 1992-I」、横幅8.4mに繰り広げられる実験的な金属版画「Fb (hi) 1」、岩山の風景を擬似的に表した「ケルンとチョコストーン」、機械部品によるオブジェ作品「コンパクト・オブジェ」、歯車などの機械を版にした版画作品「Z30,a」など、作品計28点。

また、アルミや鉄板を薬品や工具などにより独特の方法で加工した珍しい版画原版26点を初公開します。

作家紹介 一原有徳

1910年徳島県那賀郡(現・阿南市)に生まれる。2010年没する。幼い頃に北海道へ移住。小樽地方貯金局に勤務しながら、1952年に油彩画を始めた。1958年の全道展、国画会展に1回切りの転写による「モノタイプ版画」を出品。1960年の日本版画協会展や朝日選抜秀作展、海外を巡回した現代日本版画展で注目を集める。モノタイプのほか、金属を様々な道具や薬品で加工する実験的な凹版の表現でも高く評価される。抽象に徹し、主題性やイメージを排しながら、様々な材質感や空間を連想させて止まない独特の作風を貫いた。1998年、当館と北海道立近代美術館の共同企画による特別展「一原有徳・版の世界」を開催。

広報用画像

一原有徳「Z30,a」

1964年

アルミニウム版腐蝕、機械部品、
歯車、ポンチ、切抜き 紙

59.0×59.0cm



展示総数、関連事業（所蔵作品展「徳島のコレクション 2011-III」）

【20世紀の人間像】 20点 会場－展示室1

パブロ・ピカソ〈赤い枕で眠る女〉(1932年)、フェルナン・レジェ〈美しい自転車乗り〉(1944年)、若い世代の間で人気の高い奈良美智(よしとも)の〈The Little Pilgrims (Night Walking)〉(1999年)などの他、1950年代 60年代の日本とヨーロッパの作品をご紹介します。また、「イギリスの作家たち」の小コーナーも設けます。

【徳島ゆかりの美術】 21点 会場－展示室2

洋画家の伊原宇三郎(1894-1976年)、水墨画家の河口楽土(1898-1991年)、日本画家の日下八光(1899-1996年)、幸田暁治〔ぎょうや〕(1925-75年)、市原義之(1943年-)の作品をご紹介します。

また、当館の隣にある徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の開館1周年にちなむ小コーナーとして、「徳島県出身作家が描いた戦前の中国」を設けます。鳥居がフィールドワークを行った中国大陸に注目し、戦前の中国で描かれた風景画などを展示します。出品作家は、三宅克己(1874-1954年)、森堯之(たかゆき)(1915-44年)、高羽敏(びん)(1902-82年)です。

【現代版画】 27点 会場－展示室1

「時代とアート」をテーマに連続した小企画を行います。時代の風物やヒーローを描いた岡本信治郎らの作例、そして実験的に版の方法論を問い直した井田照一らの作例を紹介します。

時代の風物 11月22日[火]-12月25日[日] 13点

マニアックな版の時代 12月27日[火]-1月29日[日] 14点

○この他に、美術館ロビー、屋外展示場、彫刻の小径に12作家、12点を展示します。

○作品保護のため、一部の作品は展示替えを行います。

○展示作品の合計は、**50作家** による **134点** となる予定です。

【関連事業】

【学芸員による展示解説】

11月23日[水・祝]、12月18日[日] 午後2時～2時45分／展示室1・2 [2階]

※ 観覧券をお求め下さい。

【こども鑑賞クラブ】

1月14日[土] 午後2時～2時45分／展示室1 [2階] ※ 小学生対象(こどもは無料)

特集：追悼 一原有徳 - 版のマジックに没入した半生 -

2011年11月22日〔火〕- 1月29日〔日〕

所蔵作品展「徳島のコレクション 2011- 」 徳島県立近代美術館

50歳で世に見いだされ、かつてなかった版画の分野をきりひらきながら、「一生未完成の作家」を志し続け100歳の長寿をまっとうした、あまりにもユニークなアーティスト一原有徳をここにご紹介します。現在市立小樽美術館では「終わりなき版への挑戦 没後一年 一原有徳 大版モノタイプ」展が開催されており、時期を合わせての追悼企画となります。本年の10月1日は一周忌にあたります。

未踏を求めた人生

那賀川町(現阿南市)に生まれた有徳は幼い頃北海道にわたり、小樽を終世の拠点としました。厳しい戦時体験をはさんで、若き日の有徳は最初俳句と登山に没頭します。道内のいわば名もない「未踏の頂」を走破しアルピニストとして知られる存在となりました。

ある日、趣味ではじめた油絵のパレットにペインティングナイフの不思議な痕跡を見つけたことが、有徳の人生をアートに向かわせます。勤め先の郵便貯金局で、誰もいない地下のフロアにインク

とナイフで模様を描いては紙に刷るという試行錯誤が始まりました。有徳はその未知の映像にずっととられることとなります。

拡張する版画

当時としては珍しい、一度切りの転写による「モノタイプ版画」で注目された彼は、続いてトタンやアルミなどの金属板から生まれる版画や、オブジェなどにも興味を広げ、あくなき実験制作に人生を賭けていきます。1960年代から70年代、複製技術が文化やアートを大きく変えていった時代を背景に、「版」の可能性を問う有徳の存在感はゆるぎないものとなりました。

しかし有徳はひとり、未知の映像が生まれるドラマティックな版のマジックに没入し、膨大な量の作品を作りました。えも言われぬ物質感、自然の冷徹な光景などを連想させる一原ワールドに、今作家とともに新鮮なまなざしを向けてみたいと思います。一人のアーティストの終わりのない挑戦が残した世界を、私たちは受けとめることができるでしょうか。



一原有徳 いちはら ありのり

1910年徳島県那賀郡(現・阿南市)に生まれる。2010年没する。幼い頃に北海道へ移住。小樽地方貯金局に勤務しながら、1952年に油彩画を始めた。1958年の全道展、国画会展に1回切りの転写による「モノタイプ版画」を出品。1960年の日本版画協会展や朝日選抜秀作展、海外を巡回した現代日本版画展で注目を集める。モノタイプのほか、金属を様々な道具や薬品で加工する実験的な凹版の表現でも高く評価される。抽象に徹し、主題性やイメージを排しながら、様々な材質感や空間を連想させて止まない独特の作風を貫いた。1998年、当館と北海道立近代美術館の共同企画による特別展「一原有徳・版の世界」を開催。